

に「に」通信

第一〇八号 平成十六年三月二十日

〒九三三〇八〇四 高岡市問屋町四十

有限会社 沖商店

2016.3.20

TEL 〇七六六一二五〇五五

FAX 〇七六六一二五〇〇〇

E-mail okashoten@poem.orc.ne.jp

いつもお世話になりありがとうございます。

「人は何の為にこの世の中へ生まれて来たのでしょうか」「人生の本来の目的は何なのでしょうか」「そんな人生の根本問題を皆様と一緒に考えたいと思ひ、皆様の心に一石を投じて、意見を頂く機会になることを願って本通信をお届けしている次第です。どうか忌憚の無いご意見をお寄せくださいます様お願い申し上げます。

一 ほめる・おだてる

「言つて聞かせ、やつて見せ、ほめてやらねば誰も動かぬ」と言う教訓辞があります。第二次世界大戦に活躍した日本海軍連合艦隊司令長官、山本五十六の言葉だと私は聞いておりますが、定かではありません。貴方は、ほめられることが好きですか。嫌いですか。おだてられることが好きですか。嫌いですか。

私は、ほめられることもおだてられることも大嫌いです。自尊心が高いというか、自惚れが激しいというか、自信過剰というか、へそ曲がりというか。

「そこらここの者ならいざ知らず、私ほどの者がこれぐらいする(できる)のは当たり前で、ことさら褒めて頂くほどの事ではない。私をそんな安く見るな」となるのです。

人は、自分の計らいで他人を判断します。そして、価値観や性格、ものの考え方も違ふのに、ややもすれば、相手も自分と同じ考え方だと言う前提で話し、行動します。

その傾向の強い私は、他人をあまり褒めたり、おだてたりしません。しないというよりできないのです。「ここで褒めてやれば、自分の努力が認められたと喜び、さらに努めるかも知れないのに」とは思うのですができません。

子供に対しては、私ほどの者のことだから、これくらいのこと喜んで自慢するべきではない。

社員に対しては、我が社においてはこれくらいのこと満足してはいけません。

という思いが先にたち、褒めてやるのが出来ませ

ん(心の中ではよくやったと思つているのに)。妻に対しても、感謝やねぎらいの言葉をかけてやれません(心の中では感謝しているのに)。

何故自分がこんな性格なのか自分でも分りません。私の父は、私をおだて、調子よく乗せて育ててくれた様に私は思っています。ですから、私の今のこの性格は遺伝ではないと思ひます。

それで「私は、前世で恵まれた環境に生まれ、自分の能力を見せびらかし、我儘で他に対する感謝の念が少なく、そのまま一生を終え、あの世で『来世は、他人の良い所を認め、感謝の念を持つように精神を磨く』という誓願を持って再びこの世に生まれて来た」と思っています。でも、なかなか難しいです。他人を褒めることがこんなに難しいとは。

新聞や雑誌・講演会などでも、他人を褒め・おだてるのが、どれだけ功德(効果)があるかというのを教えてくれています。仏教でも「和顔愛語」と言ひまして笑顔と優しい言葉を振り撒くことを奨励しています。

頭では理解しますが、なかなか実行に移せません。(私の前世での業があまりにも深かったのでしょうか)ところで、「ほめる」と「おだてる」は、いずれも相手をやる気にさせる言葉ですが、似て非なるものです。辞典を繰りました。

ほめる『褒める』⇒高く評価してよく言う。誉めることを認め伝える。たたえる。
おだてる『煽てる』⇒得意になるように褒める。そそのかす。

前者には、純粋な心の発露があり、陽・明・直が感じられ、後者には作為的・意図的であり、陰・暗・欺が感じられます。

それで私は思ひました。私は『褒める』と言う純粋な言葉と『煽てる』と言う不純な言葉を同様に考へていたのではないか。相手が純粋に褒めてくれるに、そんな煽てに乗るかと曲解し、折角の相手の好意を逆撫でしてきたのではないか。

改めて、自分の未熟さと驕慢さを認識させられましたが、「過ちを改むるに憚る事なかれ」今からでも遅くはない、「人間死ぬまで修行」の精神で、もっと他人の言うことを素直に受け止められる性格になるよう精進して行きたいと思ひます。

幸いにも歳をとると(この三月三十一日で満六十二歳になります)自分の体力・能力の衰えが自覚されるようになり、『俺が俺』の考え方にも自信がな

くなりませ

物事のみこみ(理解する能力)も悪くなり、今まで相手に「こんなこと、一々言わなければ、どうして理解できないのだろう」と思つていましたが、立場や能力が違えば、こちらが当然と思うことも、相手の理解し難いこともあるのだなと言うことが判るようになりました。

これから歳をとると、益々、体力・能力の衰えが進み、それに従ひ、他人にして貰うと言うことへの感謝の念も深まって行くと思ひます。「歳はくすり」と言う言葉があつたように思ひますが、良くやつた者を素直に褒め、努力している者をうまく煽て(悪意ではなく善意で)、感謝の言葉を振り撒き、死ぬまでには、今の曲がったへそを直してあの世へ帰りたいと思つています。

そうでないかと、来世また今世の繰り返しになり、冒頭の文句ではありませんが、折角、今世に生まれて来た甲斐が無いじゃありませんか。

二 紹介したい記事

本『に』に「通信」のネタ用にとつてあつた記事の中に、紹介したいものがありましたので載せませ

『敗戦と繁栄で「大切なもの」を失つた日本人』先頃、在日の韓国エリート弁護士の話を書く機会を得た。ソウル大、ハーバード大卒で米国の弁護士資格をもつ。日本の一流企業のクライアント(顧客)も多い。「かつて私は日本人はたいしたものだと尊敬していた。凄いな、と思ひ、怖かつた。韓国人が百年たつても敵わない。しかし今はこれぼつちも怖くない。畏敬の念は薄れた」と彼は言う。

何故そう思うか。「教育がないでしょう」。東大も京大もまだしっかりしているではないか。「そういう意味じゃない。日本に伝わっている大切なものを捨て、子供に伝えようとしない。私の子供は人前でも礼儀作法や親に対する姿勢がしっかりしている。日本人は日本人を捨てようとしているのではないか」。

どういう意味か。「日本人は新しい人種になろうとしている。変な米国人になろうと勝手に思い込んでいる。模倣しても絶対になれないのに」。

もう少し具体的に。「仕事上、日本の大手企業の渉外の人と会う。このころ、その人たちがガラッと変つた。国益を考えなく

なり、自分の立場だけを優先している。対面してどこの国のひとかな、と思ふ。日本人のよきも悪い。米国人にももちろんなり切れない」。

考えさせられる指摘であつた。「教育がないでしょう」を裏付ける次の調査データが雑誌に出ていた。「うそをつかないようにしなさい」と父親からよく言われる⇒日本十一%、韓国四十一%、米国四十七%、英国四十四%、

「先生の言うことをよく聞きなさい」と父親からよく言われる⇒日本十六%、韓国四十七%、米国五十六%、英国五十二%、
「いじめを注意したことが何度もある」⇒日本四%、韓国九%、米国二十八%、英国十七%、
家庭の躾や子供の正義感で、日本が崩壊している様子がよくわかる。

これについて外交評論家の岡崎久彦氏がこう語つた。「敗戦により過去の価値、自信、矜持が失われた。自分たちが生まれ育つてきた道徳を守れと、親が子に言えなくなつた。その後遺症だろう。そしてこう続けた。「日本人は世界で一番正直である、と日本人は誇りに思つていた。いまもそうかもしれないのに、誇りとして伝えていない」。

敗戦のショックに加え、その後の経済繁栄による『一億総成り金』がこの国をおかしくした。成り金のイメージは無教養、マナーの悪さ、言葉遣いのひどさ、長幼の序をわきまえない、などである。

さらに、「米国人になつたがっている」には心当たりがある。BIS規制から会計基準まで、何でも「米国の基準にあわせる」という大きなうねり。そうしなければならぬ理由はどこにもないのに。

米国通の友人が次の心配を口にしてた。「最後は言葉だ。そのうち、お前らは日本語をしゃべるな、英語をしゃべれ、と米国から言われかねない」。

米国人に「日本は五十一番目の米州になりそうだ」と言つたらこう答えたのが笑えた。「いや五十二番目だ。五十一番目はイスラエルだ」。

ニュース出所⇒WEDGE 二〇〇三年(六月号)

筆者⇒評論家 雑賀 孫市

発行所⇒株ウエッジ

有限会社 沖商店

代表取締役 沖昌弘

個人メール E-mail okashoten@poem.orc.ne.jp

通信の意見を基に個人的な連絡はいたしません